

秋葉信仰の広がり

—秋葉神社の分布に着目して—

米家 泰作

1. はじめに

高知県吾川郡仁淀川町椿山（つばやま）では、焼畑のために山を焼く際、次のような祈りを捧げていた（福井 1974：107）。

ただ今より、この山を焼きます。山の神様、地神様、どうぞお守り下さい。秋葉様、初午様、どうぞお守り下さい。這んで逃げるものは、這んで逃げて下さい。飛んで逃げるものは、飛んで逃げて下さい¹。

森と土地をつかさどる山の神や地神に続いて称えられているのが、火防（ひぶせ）をつかさどる「秋葉様」である。山火事を恐れる焼畑耕作者にとって、火の事故を鎮めてくれるであろう秋葉権現への信仰が重要であったことを窺わせてくれる。

筆者が秋葉信仰に関心をもったのは、もともとは上記の焼畑との関わりを通じてであるが、これまでその関心を深める努力を怠っていた。今回、秋葉信仰の二大拠点の一つとされる秋葉山本宮秋葉神社（浜松市天竜区春野町）が位置している浜松市を訪問した機会に、秋葉信仰とその分布について、焼畑との関わりについて留意しながら、簡単な検討を行いたい。

2. 秋葉信仰と焼畑

秋葉信仰とは、もともとは秋葉山ないし秋葉権現に対する信仰であり、修験道を基盤としている（田村 1998, 2014）。越後の修験者・秋葉三尺坊への信仰が核になったとされるが、信仰そのものの起源や成立過程については、歴史学的に実証されている事柄は少なく、未解明の点が多い。近世中頃以降、越後国の常安寺（現在の秋葉三尺坊大権現、新潟県長岡市）や遠江国の秋葉寺（同じく秋葉山本宮秋葉神社、静岡県浜松市）が核となって流行し（写真 1 参照）、江戸のように火事に悩まされた都市でも信仰を集め、東海道を往来する旅人が寄り道して参拝するようにもなった。しかし明治の神仏分離において、秋葉信仰の拠点となった修験道の寺院の多くが神道へと転向し、火の神カグツチなどを祀る秋葉神社として再出発した。そのため現在の秋葉信仰は、近世までのあり方とはかなり異なり、修験道と神道が混在したような判りにくい姿のまま現在に至っているのが特徴である。

秋葉信仰の成立や起源に関心を寄せる研究者の一部には、焼畑との関わりに触れる者もいる。民俗学から焼畑を研究してきた野本寛一（1998：23-25）は、静岡県から長野県南端

¹ 福井（1974）は片仮名で採録し、注釈を加えているが、ここでは漢字・平仮名に改め、注釈を除いた。



写真1 秋葉信仰を示す常夜灯の例（1813年建立）

旧東海道舞坂宿（浜松市舞阪町舞阪）にて筆者撮影。「秋葉大権現」の字がみえる。

部にかけて、焼畑の火入れの際に「秋葉札」を立て、延焼防止の呪術とする事例が広がっていることに着目し、焼畑と秋葉信仰の関わりを深さを示唆した。これを踏まえて、歴史学から秋葉信仰史を研究する田村貞雄（2014：26-27）も、「秋葉信仰の最初の基盤は、山岳地帯における火の信仰にある」と述べている。

しかしながら、野本が挙げている事例は静岡県から長野県南端部のものに限られ、必ずしも全国の焼畑民俗に秋葉信仰との関わりがみられるわけではない。野本自身が概観するように（野本 1975：526-538）、焼畑の火防のための儀礼や呪術は「きわめて多岐にわたる」ものであり、火防のために称えられる神仏も、地域によって様々である。その意味で、野本の指摘は、遠江国北部の秋葉寺（秋葉山本宮秋葉神社）に近接し、その影響が大きかった東海地方において、特に秋葉信仰が焼畑の火入れに組み込まれた、と理解すべきだろう。少なくとも、日本の焼畑民俗の基層に秋葉信仰の原型があったように捉えるのは難しい。野本（1975：417）は、「焼畑農民の智恵が修験道に投影された部分もあり、逆に、そうして成立した修験道の呪術が焼畑農民に影響を与えた部分もあろう」と示唆しているが、この想定は歴史学的な実証が難しい課題であり続けている。

とはいえ、小稿冒頭に引いたように、静岡県から遠く離れた高知県の椿山でも「秋葉様」が称えられていたことは興味深い。近世に秋葉信仰が広がった際に、焼畑が盛んな地域で積極的に受容されるということがあったのだろうか。この問いを念頭におきつつ、次章では秋葉神社の分布に着目して、秋葉信仰の広がりについて簡単な検討を行いたい。

3. 秋葉神社の分布

（1）分布図の作成方法

秋葉信仰の広がりを捉える上で、一つの指標となるのが秋葉神社の分布である。先述のように、近世に秋葉信仰の拠点となった寺院の多くは、明治期に神道へと転向し、「秋葉神社」

を名乗るようになったため、この社名を検索することで、その広がりをつかえることができる。もちろん、秋葉信仰を継承しつつも社名に「秋葉」の語句が無いケースや、寺院として存続したケースも考えられ、秋葉神社だけが秋葉信仰の広がりを見せているわけではない。その点について留保が必要であるが、寺院として存続した例については寺院名のみでは秋葉信仰の有無が判断しにくいいため、今回は機械的に検索することが容易な秋葉神社のみを取り扱う。

このような関心から秋葉神社の分布に着目した先行研究に、田村(1990a・b, 1991, 1995)がある。田村は、『全国神社名鑑』(三浦 1977)に収録された神社の一覧(各都道府県の宗教学法人名簿による)を活用して、全国の秋葉神社(秋葉社)を都道府県ごとにリストアップし、解説を付した(ただし静岡県・愛知県に関してはリストが割愛されている)。田村の作業からは、やはり東海地方に秋葉神社が多いこと、しかし北は北海道から南は高知県・大分県まで秋葉神社が分布していることが理解されるが、残念ながら分布図としては提示されていない。

そこで小稿では、GISを用いて秋葉神社の分布図を提示し、分布の空間的な様相について検討する。その際、田村がリストを割愛した静岡県・愛知県を含め、『全国神社名鑑』掲載社を網羅するだけでなく、Google マップで検索しうる秋葉神社(あるいは秋葉社、秋葉明神、秋葉権現、秋葉大権現)についても分布に加え、より詳細な分布図の作成を意図した。日本のGoogle マップの地図データは住宅地図を手がけてきたゼンリンが提供しており、地形図では名称の記載がない小規模な神社や祠までが収録されているため、このような関心からの検索に有効であった²。

(2) 分布の特徴

図1は全国の分布を示したものであり、表1には典拠としたGoogle マップと『全国神社名鑑』ごとに得られた神社数を示した。前者からは972社、後者からは353社の情報が得られた。ただし両者には重複するものがあるため、それを差し引けば、合計1,139社となる。『全国神社名鑑』は、全国の秋葉神社のうち、多く見積もっても30%程度を収録するにとどまっていたことがわかる。ただし『全国神社名鑑』記載社のうちには、刊行後に住所表記が変わったために、すぐには位置が同定できなかった神社が10社あり、それを除く1,129社を図1に示した。

図1・表1から、まずは全国的な分布について見れば、『全国神社名鑑』で1社のみの北海道や、0社の和歌山・鳥取・島根・宮崎・鹿児島・沖縄県にも秋葉神社の分布がみられ、全国に信仰が広がっていることが窺える。特に、旭川市を最北例とする北海道や、大東島にみられる沖縄県は、近代以降の広がりを反映したものと推測される。また、和歌山・鳥取・

² 2017年10月にGoogle マップ (<https://www.google.co.jp/maps/>)を検索して座標データを収集した。

Google マップは地図の表示範囲に応じて検索の精度が変動するため、筆者の使用するパソコンの画面上でおよそ1万分の1程度の大縮尺を保ち、検索漏れが無いように留意した。

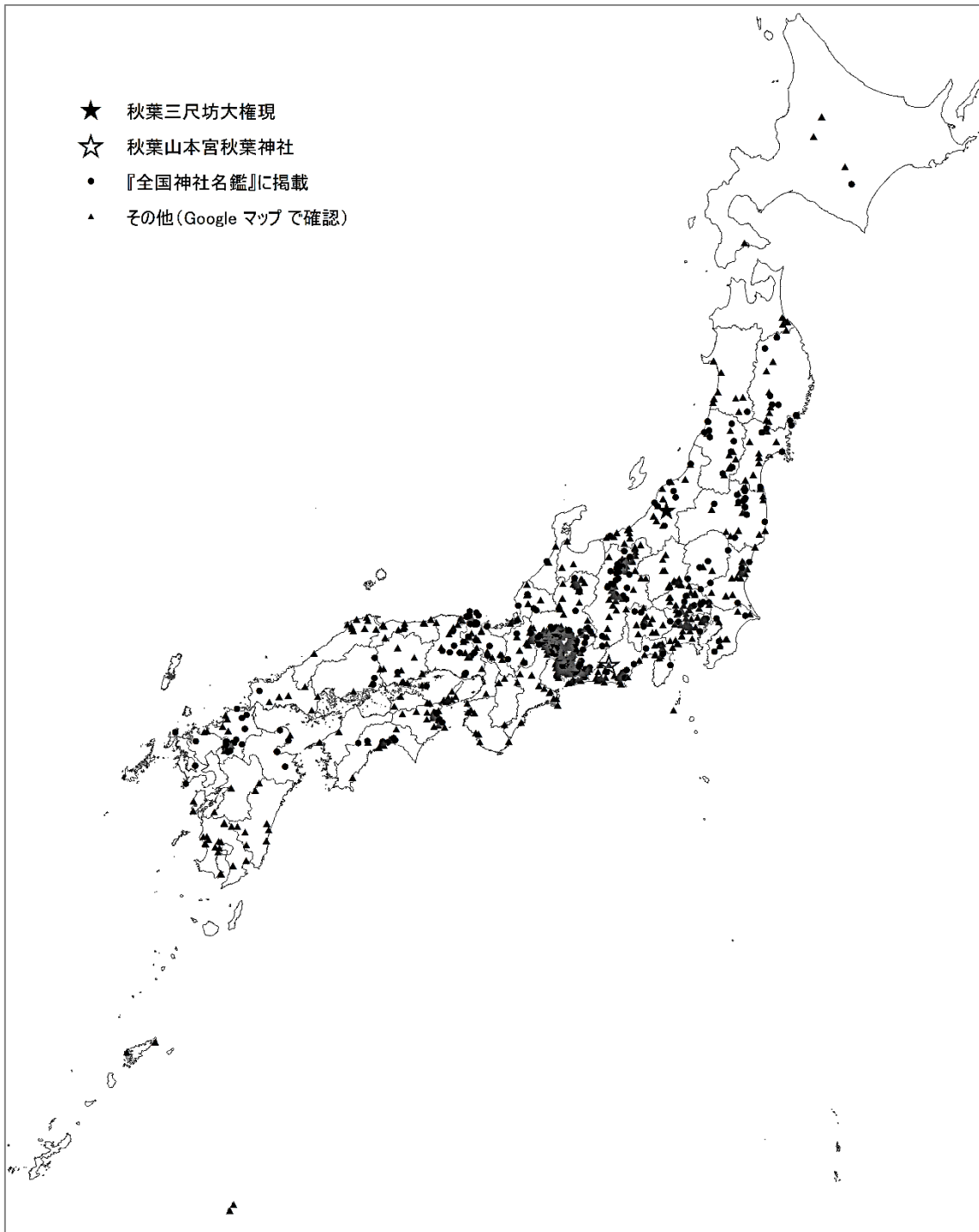


図1 秋葉神社の分布

『全国神社名鑑』(三浦 1977) および Google マップより作成。

島根・宮崎・鹿児島県では、『全国神社名鑑』掲載社が皆無であるにもかかわらず、比較的多くの秋葉神社がみられる。宗教法人のみを掲載する『全国神社名鑑』は、秋葉信仰を体現する神社の組織化の進展を反映しているのかもしれないが、秋葉信仰そのものの広がり

表1 都道府県ごとの秋葉神社数

都道府県	(A) Google マップ	(B) 全国 神社名鑑	(A)・(B)に 重複	都道府県	(A) Google マップ	(B) 全国 神社名鑑	(A)・(B)に 重複
北海道	5	1	1	大阪	1	0	0
青森	7	0	0	兵庫	27	11	6
岩手	14	6	5	京都	21	16	3
宮城	13	5	4	滋賀	18	4	2
秋田	9	1	0	奈良	3	0	0
山形	21	14	6	和歌山	8	0	0
福島	20	13	2	鳥取	10	0	0
東京都	21	6	6	島根	12	0	0
神奈川	14	1	1	岡山	11	1	1
埼玉	24	6	4	広島	4	3	1
千葉	13	5	4	山口	4	1	0
茨城	17	5	3	徳島	14	5	3
栃木	5	4	3	香川	6	1	1
群馬	15	0	0	愛媛	2	0	0
山梨	14	4	1	高知	20	6	3
新潟	24	12	5	福岡	17	13	6
長野	52	32	7	佐賀	1	2	1
富山	3	0	0	長崎	2	3	2
石川	3	1	0	熊本	6	0	0
福井	10	5	1	大分	4	5	3
愛知	219	77	54	宮崎	7	0	0
岐阜	177	74	40	鹿児島	19	0	0
静岡	41	10	7	沖縄	2	0	0
三重	12	0	0	計	972	353	186

『全国神社名鑑』（三浦 1977）および Google マップより作成。

必ずしも反映していない場合があることに、注意する必要がある。

一方で、秋葉神社が密集している地域として、①岐阜南部から愛知・静岡県南部、および②関東南部が突出しており、さらに③長野県北部や、④兵庫県北部などを挙げることができる。特に愛知県では合計 242 社（重複分を除く）、岐阜県も 211 社（同）があり、日本で最も秋葉神社が密集している地域は、濃尾平野から岡崎平野にかけてであるといつて差し支えない。図 2 に拡大したように、濃尾平野では隣接する集落にそれぞれ秋葉神社（秋葉社）

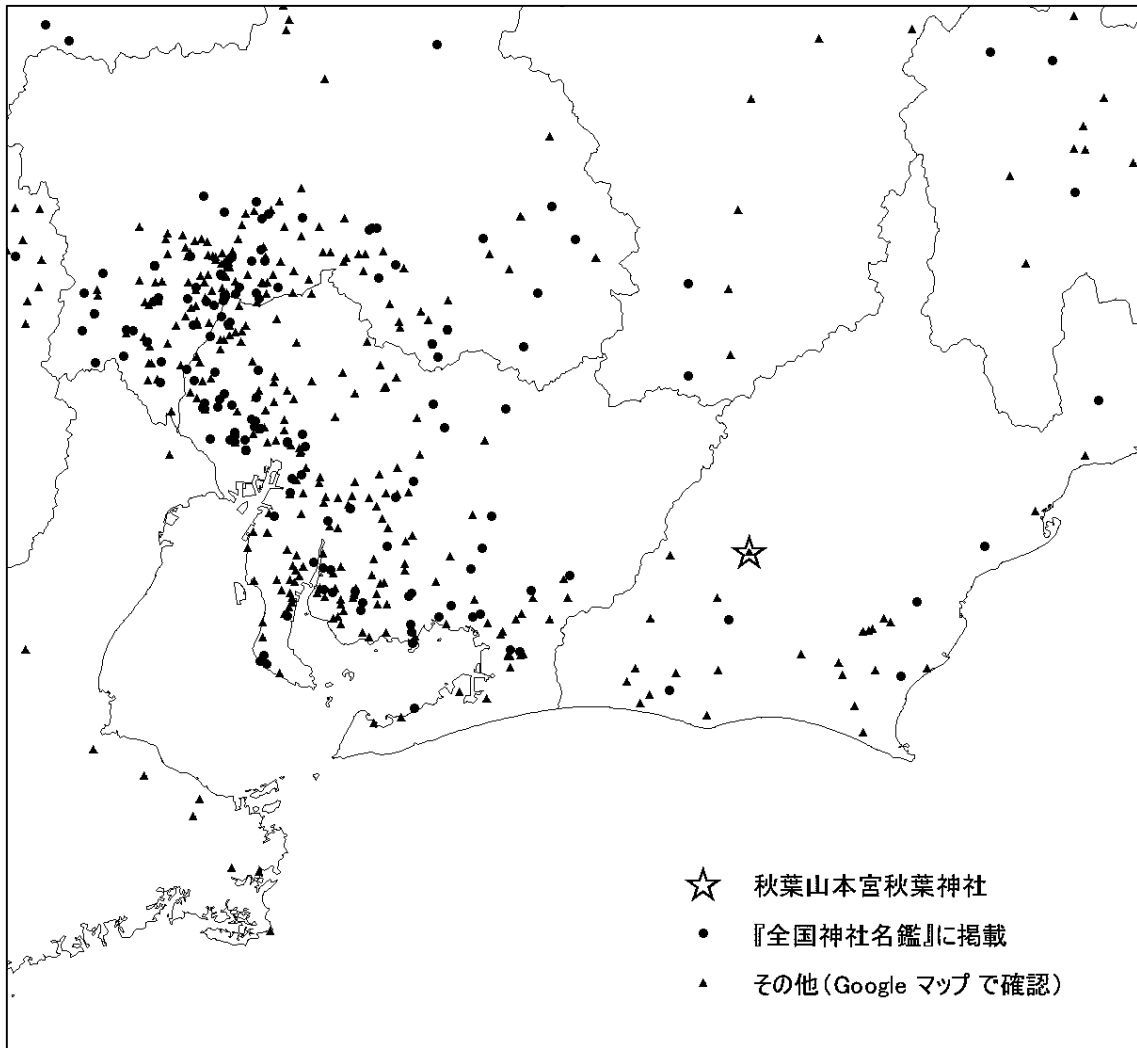


図2 東海地方における秋葉神社の分布

『全国神社名鑑』（三浦 1977）および Google マップより作成。

が鎮座していることも珍しくないほどである。近世名古屋の秋葉信仰に関しては田村(1995)に詳しいが、名古屋の周辺一帯を含めて、秋葉信仰地帯として理解することができる。この地域一帯では、火事に悩まされた都市の信仰という側面だけでなく、農村における信仰という側面も小さくないことが、図2からは窺われるのである。

こうした秋葉神社の偏在は、図1に示した近世期の拠点である秋葉三尺坊大権現（新潟県長岡市）や秋葉山本宮秋葉神社（静岡県浜松市）を中心とするような分布では全くないということも、重要な特徴である。山岳信仰を特徴とする修験道では、当該の山岳に対する信仰が核となって、そこへの距離に応じた同心円的な信仰の空間構造が形成されたことが知られている。秋葉神社の分布は、そのような核の不在、あるいは求心力の弱さを示しているのであり、むしろ都市や村落の火伏という現実的な希求のために導入され、しかもその導入にはかなりの地域差があった、ということの意味している。その背景には、一方では秋葉信仰

そのものが近世中期以降に拡大したという歴史の短さがあり、その一方では火事への恐れという切実な問題が迅速な普及を後押しした、ということが考えられる。また、そのなかで、もともとは様々であった火伏への信仰が、後に秋葉信仰として後付けされ、社名を秋葉神社（秋葉社）に改称した可能性についても考慮する必要があるだろう。

（3）秋葉神社の分布と焼畑

小稿の最初で触れた秋葉信仰と焼畑との関わりという観点に立ち返れば、東海地方で焼畑が盛んであった奥三河・北遠・南信の一带では、秋葉山本宮秋葉神社のお膝元であるにもかかわらず、むしろ秋葉神社の分布に乏しいことが目につく。先に触れたように、この地域では焼畑の火入れ儀礼に秋葉信仰が介在していることが指摘されているが、そのことは秋葉神社の分布には反映されていない。その理由について、筆者は確たる見通しを得ていないが、山村に伝わる諸々の信仰のなかで、例えば山の神信仰の重要性に比較すれば、秋葉信仰は必ずしも独立した神社を建立するという形に至るほど、明確で大きな地位を占めていたわけではない、と考える必要があるだろう。

他の旧焼畑地帯や山村地域においても、秋葉神社が特に密に分布しているという特徴を指摘するのは難しい。図1を見る限り、例えば中国山地西部や紀伊山地の中央部、北陸の白山麓、北上山地などは空白地帯となっている。紀伊山地や白山は古くから修験道が発展した地域であり、そこに秋葉信仰が大きく組み込まれていなかったことは、むしろ重要な特徴として理解しておくべきだろう。一方で、九州山地北部や中国山地東部には秋葉神社が散在している。英彦山がある九州北部は、修験道との関わりも考えられる所である。焼畑地帯であった四国山地や九州山地中部では、少数の秋葉神社が確認できる。

このように地域によって様々に異なる状況を考慮すれば、焼畑と秋葉信仰の関わりについて、秋葉神社の分布から一律に指摘できることは少ない、といわざるをえない。冒頭に挙げた高知県椿山の場合は、近隣に秋葉神社があり（高知県吾川郡仁淀川町別枝）、その影響が考えられる所である。むしろ山村地帯に独立した秋葉神社がある珍しい例として、別途検討が必要であろう。

4. おわりに

小稿では、もともと焼畑との関わりを念頭において、秋葉神社の分布図を提示し、その特徴について若干の指摘を行った。その結果、秋葉信仰の拠点とみなされてきた秋葉三尺坊大権現（新潟県長岡市）と秋葉山本宮秋葉神社（静岡県浜松市）が、信仰の空間的な広がりという点においては、その核として影響力を及ぼしていたわけではないことが確認された。また、濃尾平野から岡崎平野にかけてが、非常に特徴的な秋葉信仰地帯を形作っていることが指摘できた。こうした秋葉神社の分布は、近世までの信仰の広がりをそのまま反映しているわけではなく、明治期の神仏分離によって秋葉信仰が被った打撃や、独立した神社という形態を取っていない信仰にも留意が必要であるが、必ずしも歴史が古いわけではない秋葉信仰の展開を考える際に、ヒントとなるものを含んでいる。

一方、焼畑との関わりについては、残念ながら小稿では特筆すべき知見を提示できず、むしろその関わりは特定の地域に限定されていたように理解される。ただし、それはあくまで独立した神社のみに着目しての結果であり、検討を深める余地はまだ残されている。後考を待ちたい。

文献

- 野本寛一 (1975). 『焼畑民俗文化論』雄山閣出版.
- 野本寛一 (1998). 火と水の信仰. 田村貞雄監修 (1998). 『秋葉信仰』雄山閣出版, 18-27.
- 田村貞雄 (1990a). 東日本の秋葉信仰—全国各地の秋葉信仰 (一)—. 地方史静岡, **18**, 1-40.
- 田村貞雄 (1990b). 西日本の秋葉信仰—全国各地の秋葉信仰 (三)—. 静岡大学教養部研究報告, **26(1)**, 71-119.
- 田村貞雄 (1991). 中部地方の秋葉信仰 (上)—全国各地の秋葉信仰 (二)—. 地方史静岡, **19**, 97-123.
- 田村貞雄 (1995). 中部地方の秋葉信仰 (下)—全国各地の秋葉信仰 (二下)—. 地方史静岡, **22**, 1-44.
- 田村貞雄 監修 (1998). 『秋葉信仰』雄山閣出版.
- 田村貞雄 (2014). 『秋葉信仰の新研究』岩田書院.
- 福井勝義 (1974). 『焼畑のむら』朝日新聞社.
- 三浦 讓 編 (1977). 『全国神社名鑑』全国神社名鑑刊行会.